



12 月号

2024 No.20



中日新聞「リンクト」
LINKED
plus+
シアワセを
つなぐ仕事

SPECIAL REPORT

病院と在宅を繋ぐ
新しい看護の挑戦
訪問看護特集

CONTENTS

- 1 Care 療養支援のおはなし
- 2 地域医療を支える新しい力
- 3 地域医療の豆知識
- 4 NEWS & TOPICS

Message

院長メッセージ

当院では2024年4月、訪問看護ステーションを開設し、病院から在宅療養へのスムーズな移行を支援しています。今回の特集では訪問看護ステーションの果たす役割や訪問看護の実例についてご紹介します。ぜひ一読いただき、安心な在宅療養を支える私たちの取り組みを知っていただきたいと思います。

SPECIAL REPORT

病院と在宅を繋ぐ 新しい看護の挑戦

訪問看護特集

退院間もない時期を集中的にケアし、
病院から在宅へのスムーズな移行をサポート

CHAPTER 01

在宅療養を可能にする 訪問看護サービス

「こんにちは。おかげんはいかがですか」。
この日、西尾市民病院・訪問看護ステーションの内藤香利（看護師）は、いつものように在宅療養中の男性患者のもとを訪れていた。この患者は肺がんを患い入院していたが、1カ月前に退院。平日は毎日、内藤が訪問し、健康状態をチェックして、在宅酸素の管理、痛みのコントロール、おむつの交換や清潔の援助、薬の管理などを行っている。本人や家族に「何か困ったことはないですか」と尋ね、さまざまな相談に応えるのも内藤の大きな役割だ。「実は来月、遠方に行く予定があつて、どうしようかと…」という家族からの相談。患者を一人残しての遠出に躊躇しているようだった。内藤はすぐに、レスパイト入院（家族が介護から解放され、休息をとるための短期入院）を提案した。「市民病院というバックアップがあるから、レスパイト入院もご提案できますし、病状が悪化したときの入院もいつでもスムーズに受け入れることができます。ご家族が無理をせず介護を続けられるように全力でお手伝いします」と内藤は話す。

この患者と内藤が最初に会ったのは、入院している病棟だった。肺がんが進行していて、残された時間はそれほど多くない。本人は「家に帰りたい」と考えていたが、家族は自宅で世話するのは到底無理だろう

と諦めていた。そこで、「退院しても、私たち訪問看護師が毎日通って医療的な処置をしたり、介護の方法をアドバイスしたりするなど、いろいろお手伝いできますよ」と伝えたところ、家族は覚悟を決めて在宅療養に踏み切ったのだ。「入院中からご本人やご家族とコミュニケーションをとれるのが私たちの強みですね。また、病棟の看護師からも情報が得られるので、入院中と同じような看護を継続して提供できます」と内藤。さらに、症状に応じてそれぞれの専門分野の認定看護師のバックアップが得られるのも、市民病院ならではの体制といえるだろう。褥瘡（じよくそう…床ずれ）や認知症、嚥下（飲み込む機能障害など、専門的なケアが必要な場合、院内の認定看護師が同行訪問し、適切なケアをタイミングよく提供している。

COLUMN

- 西尾市民病院では、摂食嚥下障害看護、認知症看護など特定の8つの分野において、専門的な知識と技術をもつ認定看護師を育成。このうち6分野はそれぞれ2名体制にして活動の範囲を広げている。
- さらに近年は、救急・集中ケアや褥瘡、慢性創傷など特定の分野で、一定の診療補助業務（特定行為）を行う特定認定看護師も誕生し、専門性を備えた看護師が、在宅療養においても看護の質を高めるために活躍している。



BACKSTAGE

看護の連携で 病院と在宅を繋ぐ

●入院期間の短縮化に伴い、医療依存度の高い状態で退院していく患者が増えている。病院での24時間体制の看護から一転、自宅に戻った患者本人はもちろん、家族も大きな不安を抱えての新生活となる。

●その最初の慣れない時期を乗り切るには、病院の看護と緊密に連携した手厚いケアが必要だ。病院付属の訪問看護ステーションだからこそできるアプローチが、市民の在宅療養を強力に後押ししている。



CHAPTER 02 病院から在宅へ移行する 段差を埋める役割

西尾市内にはいくつかの訪問看護ステーションが運営されているが、同院があえて付属の訪問看護ステーションを開設したのはどうしてだろうか。「それは、患者さんの在宅移行期を徹底して支援するためです」と内藤は話し、次のように続けた。「退院が決まっても最初は病状が不安定で、多くの医療処置を必要とします。また、一人暮らしなどで療養環境が整っていないこともあり。そうした患者さんのケアをすべて地域の訪問看護ステーションにお願いするのは、リソース的になかなか難しいのが現状です。そのため、以前は入院期間が長引いたり、在宅療養を諦めたりしてしまうケースもありました。そんな状況を改善するために、退院後すぐの期間、当院の看護師が毎日訪問して手厚くケアする体制をつくりました」。市民病院の訪問看護であれば、病院のバックアップ機能を活用する

ことで、多くの医療処置が必要な患者もしっかりと在宅でケアできる。「今はかなり困難なケースであっても、スムーズに退院していただけるので、ご本人にもご家族にもとても喜んでいただいています」と、内藤はほ笑む。訪問看護サービスの期間は原則として3カ月程度。病状が落ち着き、医療処置の回数が減り、家族も介護に慣れてきたら、地域の訪問看護ステーションへバトンタッチする体制を整えている。

今後の課題はどんなことだろうか。「今はまだ私たちが使うカルテと、院内の電子カルテが連携できていません。ゆくゆくは連携が進み、リアルタイムに院内の医師や看護師と情報共有できるようになればいいなと考えています。また、患者さんによっては、3カ月後も継続した訪問を望まれる場合もあります。そういうケースにも柔軟に対応していけたら理想的ですね」と内藤。走り始めたばかりの訪問看護ステーションで、目の前の課題を一つ一つクリアしながら、在宅療養を幅広く支えていこうとしている。

療養支援 の おはなし

テーマ

西尾市民病院訪問看護ステーション 〈ウェイル〉

しっかりと
サポート!

病院を退院して、在宅療養へ
その最初の一步を手厚い看護で支えます



当院を退院した患者さんの 不安な日々に寄り添います

2024年4月、当院に西尾市民病院訪問看護ステーション〈ウェイル〉がオープンしました。ウェイルの名前は、西(west)と尾(tail)を合わせたもの。ウェイ(英語)は、道・方法、エイル(古ノルド語)は、援助・慈悲という意味があり、〈慈悲の道、援助の方法〉という意味も込めました。また、エイルは、北欧神話で最良の医者とされています。西尾市民病院訪問看護ステーションのメンバーは、看護師3名、リハビリテーションスタッフ1名の合計4名体制。当院を退院された方で、主治医が訪問看護を必要と認めた患者さんを主な対象に、一部、外来の患者さんも含めて、ご自宅を訪問して必要な医療処置や看護を丁寧に提供しています。

最初の3カ月をしっかりと支え 地域の訪問看護へ引き継ぎます

当ステーションの特徴は、退院間もない時期(約3カ月)の看護に特化していること。最初は病状が不安定で、ご家族も在宅療養に強い不安を抱えていらっしゃる。その不安な時期に集中して訪問することによって、病院から在宅へのスムーズな移行をサポート。従来であれば、在宅療養を諦めていたような医療依存度の高い方にも、安心してご自

宅に戻っていただいて、その後、状態が安定してきたら地域の訪問看護ステーションへ紹介する体制を整えています。

訪問看護サービスの内容は、健康状態の観察、食事や排泄、入浴介助、リハビリテーション、服薬管理、在宅酸素などの医療機器の管理や褥瘡の処置、療養環境の整備、痛みのコントロール、主治医との連携や調整、急変時の対応など多岐にわたります。また、ご家族の相談にのったり、介護方法をアドバイスしたりするなど、ご家族の支援にも力を注いでいます。



Message

私たちが支援します



西尾市民病院
訪問看護ステーション看護師
内藤 香利

患者さん一人一人に合わせた看護を提供しています

訪問看護は、病院での看護と違って、患者さん一人一人に合わせたケアを提供できる良さがあります。お家の環境や生活スタイル、ご家族の状況などを把握して、必要な看護をタイミングよく提供し、患者さんが一番快適に過ごせるような療養環境を整えることが私たちの大きな役割だと考えています。

訪問時に大事にしているのは、患者さんやご家族とのコミュニケーションをしっかりとること。患者さんがどんなことを望んでいらっしゃるか、ご家族は介護に疲れていないか、など。何気ない会話を通じて、療養生活のご希望や困りごとを見逃さないように注意して、少しでも長く、住み慣れたわが家で心地よく生活できるように支えています。

療養支援 の おはなし

認知症サポートチームが、 療養生活をしっかりと支えます

高齢化が進む中、当院でも認知症を持つ入院患者さんの増加が見られます。認知症患者さんは、入院という環境の変化によって症状が悪化したり、意識の状態が低下したりすることがあります。そのため、身体の病気が治癒しても、生活の質が低下してしまうケースも少なくありません。

当院では、認知症を持つ患者さんが、生活の質を維持しながら、十分な身体の治療を受けられるよう、〈認知症ケア〉に力を入れています。その取り組みの中心となるのが、医師、認知症看護認定看護師を含む看護師、公認心理師などで構成された〈認知症サポートチーム〉です。このチームは、患者さん

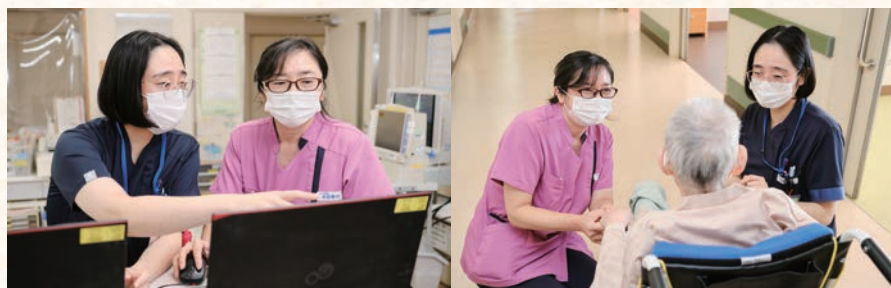
が安心して治療を受けられるよう、療養生活を包括的に支援しています。

身体と生活機能の保持・向上に 役立つ院内デイケアを実施

認知症サポートチームでは、週に2回病棟を巡回し、患者さんの困りごとに関する相談に対応するほか、病棟看護師への指導も行っています。

また、入院生活にリズムを与えるため、週1回の院内デイケアを実施していま

す。このデイケアでは、牛乳パックで作った積み木の組み立て、ボードゲーム、場所や時間、季節を思い起こす話し合い、体操、風船バレー、塗り絵や計算など、多彩なプログラムで、午前中の1時間半を過ごしていただいています。院内デイケアに参加された患者さんは、笑顔や意欲の向上、人を思いやる気持ちが見られる、夜によく眠れるようになるなどの効果が確認されています。これらの取り組みは、認知症患者さんの身体機能や生活機能の維持・向上に役立っています。

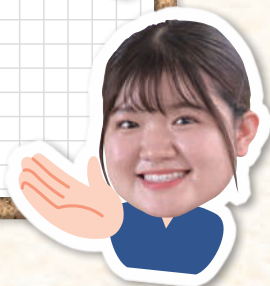


テーマ

認知症ケア

身体の治療をきちんと受ける
ことができるよう、チームで
認知症患者さんを支援します

病気を
治すだけじゃ
ありません



Message

私たちが支援します



左) 余語 華代
(認知症看護認定看護師)
右) 平岩 彩菜
(認知症看護認定看護師)

認知症を理解し良好な関係を築くために正しい知識を

認知症看護認定看護師は、認知症看護に関する専門外来(毎週水曜日9時～11時)を担当するほか、地域での出前講座を通じて認知症に関する講習も行っています。こうした場では、ご家族や配偶者の方からの困りごとを伺い、それが認知症の症状に該当するかどうかを含め、認知症について丁寧に説明しています。

正しい知識を持って接すると、たとえば「怒る」という行動の背景を理解しやすくなり、それが認知機能の低下によるものかどうか判断しやすくなります。高齢化が進む現代、認知症は誰にでも起こる可能性があります。お互いを大切にし、良好な関係を維持するためにも、ぜひ認知症の正しい知識を身につけてください。



地域医療を支える

新しい力

チカラ

対談企画

初期臨床研修医

看護師



私たちの
仲間をご紹介

地域に根ざした当院の魅力は、多職種連携の強さ



研修医1年目の千住医師、入職2年目の松崎看護師、実際の医療現場に出て、何を感じましたか？

松崎 僕は地域包括ケア病棟に勤務しています。入職以来、先輩方が新人を非常に気に掛けてくださる環境に感謝しています。指導は優しく丁寧でありながら、必要なときには厳しい意見も伝えてくれるため、非常に学びの多い職場だと感じています。

千住 僕は、コメディカルの皆さんから医師へのサポートが非常に手厚いことを日々実感しています。特にベテラン看護師の方々は経験豊富で、救急患者さんに必要な対応を早く見通せる一方、診療の指示を出す医師をしっかり立てつつサポートしてくれるため、気遣いに感謝しています。

松崎 コメディカルについて言えば、患者さんの経過を見て、今後の治療方針を多職種でしっかり共有して連携を取っている点も素晴らしいと思います。

千住 僕は研修先を選ぶ際、ここの救急外来の見学で多職種連携の雰囲気を感じ、当院を選びました。今、それを実際に体感しているところです。



これから先どんな医師、看護師を目指しますか？

千住 医療提供において、医師一人ではできないことは本当に限られています。そのため、コメディカルの皆さんに「この人となら働きやすい」と思ってもらえる医師でありたいと考えています。連携がうまく取れないと、患者さんにとって不利益になるからです。

松崎 僕は、患者さんから頼られる看護師を目指しています。患者さんから「あなたなら何でも話せる」と思ってもらえるような存在になりたいですね。それは無理に聞き出すのではなく、患者さんの思いを自然に引き出せる看護師のことだと思います。

千住 確かに、患者さんの声や思いを聞くことはとても大切ですね。それがより良い治療に繋がると、僕も思います。

松崎 まさに地域に根ざした医療を提供する、当院ならではの地域医療ですね！



どんなに多忙でも、患者さんに失礼のないよう常に心がけています。



患者さんが元気に退院される姿を見ることが、何よりのやりがいです。

初期臨床研修医(1年目)

千住篤史(せんじゅう あつし)

愛知県名古屋出身。医師である父の影響もあり、自然と医学の道を志しました。

看護師(2年目)

松崎拓海(まつざき たくみ)

愛知県西尾市出身。両親と兄が看護師という環境で育ち、人の命に関わる仕事を目指しました。

こんな言葉知っていますか？ 地域医療の 豆知識

M A M E C H I S H I K I

テーマ 摂食嚥下

今回は
(摂食嚥下)について
学びましょう



高齢者の「摂食嚥下障害」は、 食べることや飲み込むことに必要な 器官の機能低下によって生じます

高齢化が進む日本では、2025年に団塊の世代が75歳以上の後期高齢者に、2040年には団塊ジュニア世代が65歳以上の高齢者になります。このような高齢化の進展が社会に与える影響は幅広く議論されていますが、医療・介護分野も例外ではありません。その中でも特に注目されているのが、高齢者の「摂食嚥下障害」の増加です。

摂食とは「食べること」、嚥下とは「飲み込むこと」を指します。摂食嚥下障害とは、食べ物を認識し「もぐもぐ・ごっくん」と処理する過程で、必要な器官が正常に機能しない状態を指します。原因として、脳卒中などの脳血管障害や神経・筋の病気などが挙げられますが、高齢者の場合は、加齢による歯の欠損や舌の運動機能低下、咀嚼力や唾液分泌の低下、口腔感覚の鈍化などが主な要因です。

この障害を抱える方には、治療やリハビリテーション、さらには食事介助などの介護が必要となります。そのため、医療機関や介護事業所などによる支援体制の強化が一層求められています。



西尾市民病院では

入院時に摂食嚥下機能を評価し、機能障害への適切なアプローチを行います

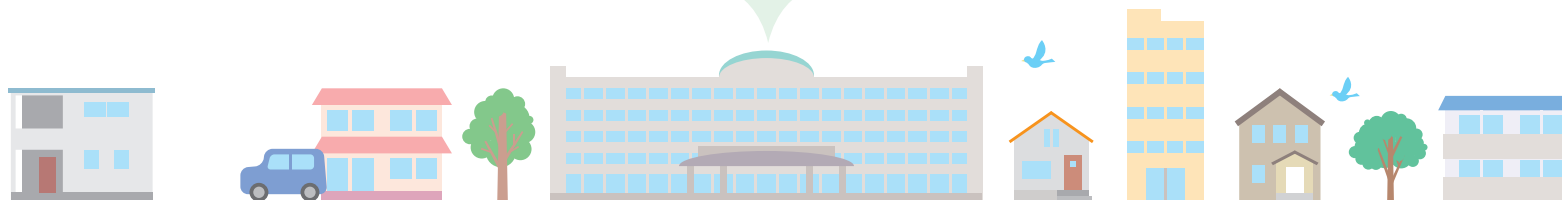
高齢の方が摂食嚥下障害を発症すると、栄養状態が悪化し、病気で入院した際には入院期間が長引くなど、負のサイクルに陥りやすくなります。このサイクルを断ち切るには、筋肉のトレーニングを通じて摂食嚥下機能を改善し、食べられる状態を取り戻すことが重要です。

当院では、入院と同時に摂食嚥下障害看護認定看護師が患者さんの摂食嚥下機能を評価し、適切な口腔ケアの方法や食事内容、摂取方法を判断します。病棟看護師と連携しながらリハビリテーションをサポートすることで、個々の患者さんに応じたケアを提供しています。また、特定行為研修を修了した特定認定看護師が在籍しており、訪問医療時に医師の手順書に基づいてタイムリーな処置を行うことが可能です。

支援では、患者さん本人の意思を最優先に考えます。無理に食べさせたり、点滴に頼り過ぎたりするのではなく、動く機能を鍛え、不足する部分を補いつつ、食べられる形態や方法を模索して丁寧に対応しています。

さらに、摂食嚥下障害看護認定看護師が専門外来（第2・第4火曜日）を担当するほか、地域での勉強会を開催し、高齢者や介護福祉士、ヘルパー、市職員向けに啓発活動を行うなど、院内外で幅広い取り組みを展開しています。

看護部 渡辺佑斗
(摂食嚥下障害看護認定看護師、
特定認定看護師)



西尾市民病院フェスタを6年ぶりに開催!

2024年11月2日(土)、地域住民の皆さんに西尾市民病院を身近に感じていただくため、〈西尾市民病院フェスタ〉を6年ぶりに開催しました。当日は750名を超える方にご来場いただき、ご家族連れを中心に大盛況となりました。

フェスタでは、手術室体験をはじめとする病院のお仕事体験、ちびっこ白衣体験、「ディア・ファミリー」(先天性の心臓病を患う子を救うため、人工心臓の開発に挑んだ父とその家族を描いた映画)の上映や、主人公のモデルである筒井宣政氏のトークイベント、健康よろず相談、ダンボール迷路など多彩な企画を実施しました。特に体験コーナーが好評で、「子どもが楽しそうだった」「病院が身近に感じられた」との声が多数寄せられました。また、「市民の健康維持に貢献していただきありがとうございます」といった感謝の言葉もいただき、職員一同大きな励みとなりました。今後も地域に根ざした取り組みを進めてまいります。



地域医療デジタル掲示板 広告募集

企業の皆さま、医療機関・介護施設の皆さま

西尾市民病院、市役所設置の
大型モニターで市民の皆さんに
情報をお届けできます。

※掲載事項および内容には、審査がございます。



お問い合わせ・
お申し込みは
こちらから



合同会社プロジェクトリンク事務局
info@project-linked.com

看護師募集中!

お気軽にお問い合わせください。



お問い合わせ先

西尾市民病院 事務部 管理課 職員担当
0563-56-3171 (内線2286)

安心して働ける
サポートがあります。

病院広報WEBマガジン



こちらから



西尾市民病院からの最新TOPICS
や検査・治療・ケアに関する情報などをお届けし
ます。ぜひご覧ください。



LINE〈公式〉アカウント

病院広報誌「Ciao」のLINE〈公式〉アカウント
を開設しました。QRコードから「友だち追加」を
お願いいたします。



西尾市民病院

NISHIO MUNICIPAL HOSPITAL

〒445-8510 愛知県西尾市熊味町上泡原6番地

TEL 0563-56-3171 (代表) URL <https://hospital.city.nishio.aichi.jp/>



12 月号 No.20

発行責任者/院長 榎田 政隆

発行/西尾市民病院

記事提供/中日新聞広告局

編集協力/プロジェクトリンク事務局

発行日/2024年12月00日